

宋代先賢祭祀の理論

梅村 尚樹

地方学校の歴史を考えた場合、北宋期は重要な転換点に当たる。中央政府は地方学校設立を政策的に促進させ、学校制度を主要な仕官経路として位置づけたからである。ではその意図・目的はどのような点にあったのだろうか。その一つの答えは士大夫の統一的な養成、教化を保証する点にあり、これらの点は従来教育史や科挙史の文脈で既に論じられてきた。しかしこの問題にはもう一つの側面があり、学校制度とはそもそも理念的なものであるため、古の政治を復興するという宋代における新たな思想的潮流からも理解されるべきものである。

本稿はこの点を重視して、地方学校における先賢祭祀に焦点を当て、主に経学的な手法を用いてその理論を分析する。その結果、以下の事柄が明らかになった。まず唐後半期には孔子廟で行われる儀礼として認識されていた積奠の概念が、北宋中期までには徐々に学校で行われるべき儀礼へと変化するとともに、廟と学が自覚的に区別されるようになった。また先師の概念も変化した。先師とは唐代には主に専門の師を意味していたが、北宋における新たな経学者たちは、『周礼』の解釈を通じて道徳を備えた人物を意味することを提示した。さらに『礼記』に見える「凡積奠必有合」の新しい解釈が北宋時期に現れたが、それにもかかわらず古い解釈を用いて地方独自の先賢を祀ることを正当化した経学者たちもいた。特にそのうちの一人である魏了翁は、全国であまねく周敦頤を祀ることを批判し、また祖先祭祀の原則を強調している。最後に『周礼』の郷先生概念も南宋末期に変化し、地方学校において郷賢の祭祀を正当化することとなった。

以上、唐代から宋代へと先賢祭祀についての言説を分析することによって、当時の士大夫たちがどのように地方学校を受容したかの一端を明らかにできるであろう。